写真人とその本　15　／桜井栄一

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー
学芸員　宮﨑真二

桜井栄一（さくらいえいいち）（1909-1998）は、1935 年に東京帝国大学工学部機械工学科を卒業し、高千穂製作所（現：オリンパス）に入社しました。同社が新事業としてスタートさせた写真用レンズ、カメラの企画、設計に当初から携わり、諏訪工場長、事業部長兼設計部長、専務取締役、関連会社社長などを歴任しています。一方で写真作家としても広く知られ、1929 年から『芸術写真研究』を主宰する中島謙吉に師事して同誌の月例会「桐畑会」設立などに携わります。1972 年には『芸術写真研究』の後継誌『光大』創刊を受け、長年世話人として活動しました。作品集として 1977 年に『郷愁』を刊行し、以降『旅愁』（1987 年）、『翠愁』（1996 年）の 3 部作としてまとめました。

『フィルム面の諸問題』

技術者としての書籍では、1955 年に『フィルム面の諸問題』（光画荘）を著しました。本書は 1952 年 6 月の『写真工業』創刊号から 4 号にわたって掲載されたブローニーフィルムの浮動によるピントの不安定性分析と、自社のカメラで採用した「フィルム面安定装置」についての記事を主体に、二眼レフカメラの設計余談や、当時主流となりつつあった 35 ミリカメラへの考えなどを加えたものです。フィルム面の安定性に関する実験を開始した動機について桜井は『カメラレビュー クラシックカメラ専科』20 号（1992 年 3 月）掲載の座談会「オリンパスの道」にて「僕はベス単ですいぶん苦労していますからね」「自分で使ってみておかしいということが分かるんですよ」「業界では、自分の悪いところの腹わたを出すようなもんだから。誰も言わないんです」と語っています。

『ズイコー夜話』

1983 年には朝日ソノラマから『ズイコー夜話 ーオリンパスカメラ外史ー』を発行しました。本書はオリンパスカメラクラブ会報の連載を基にしたものです。「オリンパスとズイコー」として、社名とレンズ名の由来解説にはじまり、戦後復興期のカメラ生産に加えて、レンズ供給先やシャッターメーカー、工業団体設立など、携わった企業と人々との動き、技術発展史、内外カメラ事情、開発設計意図などを同社製カメラの誕生に併せて、全 30 章にわたり物語風に紹介しています。

桜井は、「若し、カメラ関係の技術者が本当にカメラに趣味があるとすると或る場合にはそれがいいセンスになることもあるが、また或る場合にはそれと反対にいま言った技術屋の道楽に陥る危険が非常に多い」（『フィルム面の諸問題』）と語っています。技術者と作家の両面を知る彼は、自らの体験に基づいた絶妙なバランスでカメラを企画、設計し、後進を育てたことによって、ユーザーの琴線に触れる製品を送り出していったのかもしれません。